様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３１ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１２８８５

研究課題名（和文）民間話芸調査研究「面白い話コンテスト」の国際的展開による音声言語データの共有化

研究課題名（英文）Speech data sharing through international expansion of "Funny Talk contest"

研究代表者
定延　利之（Sadanobu, Toshiyuki）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：５０２３５３０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：音声コミュニケーションに対する理解を深め国際的に共有する上で、本プロジェクトで開発し公開してきた「わたしのちょっと面白い話」コーパスがいかに役立つかを具体的に示した。このコーパスは毎年開催している「わたしのちょっと面白い話」コンテストへの参加作品（長さは2-3分）の集成で、日本語の話しことばのバリエーションや一般の話し手の話芸の研究資料としても、「生きた」日本語話しことばの教材としても有用である。既存のコーパスを数百時間調べてもほとんど検出されない発話法が、このコーパスには豊富にみられるので、既存のコーパスの補足として利用すれば、日本語のピッチや声質などのバリエーションがよりよく理解できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語の発話について、これまで知られていたことが実は必ずしも正しくないということが、このプロジェクトで開発されたコーパスを基に、明らかにされてきている。このコーパスはインターネット上で世界に向けて無償で公開されているので、今後、このコーパスを用いた同様の研究が世界じゅうで可能になる。
これまでは「面白い話」というと、せいぜいが落語や講談のような、伝統芸術のプロの話芸しか光を当てられてこなかったが、本プロジェクトでは、日常生活の中の一般人の「面白い話」に注目することが学問的に重要であるということを、具体的に示した。

研究成果の概要（英文）：We showed concretely how we can deepen and share internationally our understanding of speech communication by using our new Japanese coorpus, the "My Funny Talk" corpus (Watashino Chotto Omoshiroi hanashi in Japanese, hereafter MFT). MFT is a collection of talks, all lasting only a few minutes in length, that were entered in a funny spoken-story tournament, held annually. It is useful as research material for variation in Japanese speech and for modern Japanese folk storyteller's art, and also as educational material on "live" Japanese speech for Japanese learners and their teachers. MFT abounds in speech variations scarecely addressed in hundreds of hours of standard spoken-language corpora. By using this corpus as a complement to previous corpora, we are better able to address actual variation of pitch and phonation for example in Japanese speech.

研究分野：話しことばを中心とした言語学

キーワード：面白さ　スキル　オラリティ　コーパス　話しことば　日本語　データ共有化　話芸

１．研究開始当初の背景

「学術情報のオープン化」が叫ばれだして久しいが、音声言語に関する（音声科学ではなく）人文学的研究領域では、収録されたデータが個々の研究者ごとに「秘蔵」されがちで、共有化はなかなか進んでいない。考えられる理由の一つは、他の研究者が収録したデータは、それが利用可能になったとしても「会話参加者どうしの人間関係」や「過去の経緯」が（収録した研究者ほどには）わからない以上、データの理解も収録した研究者には及ばないということである。もう一つ考えられる理由としては、研究者は自分が保有しているデータの観察だけで忙しく、ありきたりの内容のデータであれば、わざわざ他人のデータにまで食指が動かないということがある。

そこで申請者らは平成 20 年度以来、「わたしのちょっと面白い話」と銘打った小規模なコンテストを試行し、参加者たちの短く面白い話を音声と動画の形で収録して字幕を（一部は多言語で）付け、コーパスとしてネット上に公開してきた（http://www.speech-data.jp/kaken/chotto.html）。というのは、「面白い話」には誰しも興味を覚えやすく、またネット上で不特定多数に審査されるコンテストでは、参加者たちは自分たちの背景や文脈を知らない視聴者にも理解しやすいように話し、話のわかりにくさが改善されることが期待されたからである。

5 年間で約 150 話が収録・公開でき、研究者の注意も或る程度集めたことを受け、これまでの試行から、新展開を盛り込んだ、本格的な実施への移行を考えるに至った。

その契機となったのは、「面白さ」の文化差である。試行最終の 5 年目に、イギリス・中国・フランス・ロシアの日本語学習者による日本語の「面白い話」を若干収録したところ、日本語母語話者の話には見られない「面白い話」が観察された。この「面白さ」の違いを明らかにすべく、本格的な全世界展開をおこないたいというのが、研究開始当初の状況であった。

２．研究の目的

本研究は調査対象を日本語母語話者だけでなく日本語学習者にも拡大することによって、上記の試行を国際的な形で本実施に移行し、世界のさまざまな日本語学習者たちが日本語で「ちょっと面白い話」を語る様子を音声と動画で収録し、字幕を付けてネット上で公開することによって、「面白い話」に見られる文化差を明らかにすると同時に、音声言語に関する人文学的研究領域におけるデータの共有化を加速させようとするものである。

３．研究の方法

落語や講談といった伝統話芸はよく記録されるが、同時代（21 世紀初頭）の、それもプロではなく一般人による民間話芸を、音声と動画の形で記録し公開していくという試みは珍しく、それ自体エスノグラフィー的な観点や近年のスキルサイエンス的観点から見て大きな意義があると考えている。

４．研究成果

このプロジェクトが毎年度開催する「ちょっと面白い話」コンテストが、日本語教育学会をはじめ、世界の日本語教育機関で構成される「日本語教育グローバルネットワーク」の支援プロジェクトとして採用され、2 年間のサポートを得た（2016 年度～2017 年度）という一事にも現れているように、国際的なデータ共有化に一定の貢献をなすことができたと考えている。

また、日本語の音声コミュニケーションにおけるさまざまな発話法に新しく光を当てることを通して、従来の知見を改めることができた。

さらに、話し手自身の立場を離れた一般的なジョークが日本語社会には（落語を例外として）根付いておらず、日本語の話し手が個人的な体験談ばかりということが、通文化的にいかなる意味を持つのかも、明らかにできた。（むしろ体験談が基本であり、ジョークが特殊。この点は協力者の山口治彦氏の貢献によるところが大きい。）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　5　件）

①定延利之　2019 年 3 月　「言語行為への言語学的接近：権利・きもち・非流ちょう性・面白さをめぐって」『社会言語科学』第 21 巻第 2 号，pp. 4-17.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/21/2/21_4/_article/-char/ja

②Sadanobu, Toshiyuki. 2018 年 3 月 19 日　The “My Funny Talk” Corpus and Speaking Style Variation in Japanese. In David G. Hebert (ed.), *International Perspectives on Translation, Education and Innovation in Japanese and Korean Societies*, pp. 133-147, Cham: Springer International Publishing.

③定延利之　2016 年 9 月 30 日　「日本語文法研究と関連領域との協働：或る音声言語研究を例に」『日本語文法』第 16 巻第 2 巻，pp．3-19.

④定延利之・林良子　2016　「コミュニケーションからみた「剰余」の声：日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』第 20 巻第 20 号，pp．79-90.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20_79/_article/-char/ja/

⑤定延利之　2016 年 2 月 1 日　「内言の役割語：ことばとキャラクタの新たな関わり」金水敏（編）『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』pp．14-31.
http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/2016/03/2015-42e5.html

〔学会発表〕（計　18　件）

①定延利之　2019 年 3 月 24 日　「プロフィシェンシー＋ファボラビリティー？」日本語プロフィシェンシー研究学会春季大会，柳川かんぽの宿.

②定延利之　2019 年 2 月 17 日　「キャラ・面白さ・間を踏まえた文法 ver. 1」日本語音声コミュニケーション学会，京都大学

③定延利之　2018 年 10 月 6 日　「「すべり笑い」とマスの推論」日本語音声コミュニケーション学会大会「面白い話と間、プロフィシェンシー」，京都大学.

④定延利之　2018 年 9 月 22 日　「言語行為への言語的接近：権利・きもち・非流ちょう性・面白さをめぐって」（招待講演）社会言語科学会第 42 回大会，広島大学東広島キャンパス.

⑤宿利由希子，ヴォーゲ・ヨーラン，林良子，定延利之　2018 年 9 月 1 日　「ユーモアを生み出すための「間」：ボケとツッコミのタイミングに関する考察」日本認知科学会第 35 回大会，立命館大学.

⑥羅希，定延利之　2018 年 9 月 1 日　「ボケ役，ツッコミ役の発話タイミングから見る面白さに対する認識：日本語母語話者，日本語学習者，中国語母語話者の比較から」日本認知科学会第 35 回大会，立命館大学.

⑦定延利之　2017 年 2 月 22 日　「言語を生み出す煩悩」（招待講演）立命館大学大学院言語教育情報研究科・国際言語文化研究所共催学術講演会.

⑧大工原勇人　2016 年 12 月 11 日　「フィラー「コー」における心内情報処理」日本語文法学会第 17 回大会，神戸学院大学.［予稿集(ISSN 2186-3229) pp. 175-182.］

⑨定延利之　2016 年 10 月 21 日　「面白い話に見る日本語のキャラクタ」(招待講演)，天津外国語大学.

⑩三枝令子　2016 年 10 月 9 日　「語りにおける話し始めと話し終わりの表現」，ひめぎんホール

⑪定延利之　2016 年 3 月 4 日　「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究とは？」国際ワークショップ「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究の世界展開」神戸大学ブリュッセルオフィス（ベルギー）.

⑫Irina POURIK・奥村朋恵　2016 年 3 月 4 日　「「面白い話」を外国語に訳す：ロシア語翻訳への試み」国際ワークショップ「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究の世界展開」神戸大学ブリュッセルオフィス（ベルギー）.

⑬宿利由希子・昇地崇明・仁科陽江・萩原順子・櫻井直子　2016 年 3 月 4 日　「「面白い話」に対する日本語学習者の意識調査」国際ワークショップ「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究の世界展開」神戸大学ブリュッセルオフィス（ベルギー）.

⑭林良子・国村千代　2016 年 3 月 4 日　「「面白い話」は日本語教育にどう使えるか？：日仏の遠隔授業を通して」国際ワークショップ「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究の世界展開」神戸大学ブリュッセルオフィス（ベルギー）.

⑮岩本和子・楯岡求美・林良子・櫻井直子　2016 年 3 月 4 日　「エスニック・ジョークと倫理」国際ワークショップ「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究の世界展開」神戸大学ブリュッセルオフィス（ベルギー）.

⑯定延利之・林良子　2015 年 10 月 4 日　「コミュニケーション研究からみた「剰余」の声」日本音声学会第 29 回全国大会ワークショップ「「剰余」の声とそのとらえ方」，神戸大学（『音声研究』第 19 巻第 3 号，p．59）.

⑰朱春躍・定延利之　2015 年 10 月 4 日　「調音動態研究からみた「剰余」の声」日本音声学会第 29 回全国大会ワークショップ「「剰余」の声とそのとらえ方」，神戸大学（『音声研究』第 19 巻第 3 号, p．59）.

⑱定延利之　2015 年 10 月 4 日　「この語りはなぜ・どう面白い？：ビデオを通じて」研究集会「プロフィシェンシーと語りの面白さ」西宮市市民交流センター.

〔図書〕（計　1　件）

①定延利之（編）　2018 年 2 月 16 日　『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』東京：ひつじ書房.（執筆者：定延利之，新井潤，岩本和子，ヴォーゲ・ヨーラン，奥村朋恵，乙武香里，金田純平，鎌田修，国村千代，三枝令子，櫻井直子，宿利由希子，昇地崇明，瀬沼文彰，大工原勇人，楯岡求美，ダヴィッド・デコーマン，仁科陽江，萩原順子，波多野博顕，林良子，アンソニー・ヒギンズ，イリーナ・プーリク，孟桂蘭，森庸子，山口治彦，山元淑乃，羅希，羅米良，以上 29 名）（469 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕

パネルセッション開催 2 件

①定延利之・鎌田修・国村千代・仁科陽江・萩原順子・林良子　2016 年 7 月 7 日　「「面白い話で世界をつなぐ」とは？」，AJE Global Network get-together，AIDLG-AJE 主催日本語教育シンポジウム，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学（イタリア）.

②定延利之・Irina POURIK・奥村朋恵・国村千代・林良子　2016 年 9 月 10 日　「「面白い話」で世界をつなごう」，ICJLE 2016，Bali Nusa Dua Convention Centre.

ホームページ　http://www.speech-data.jp/kaken_omoshiro/index.html

６．研究組織

(1)研究分担者　無し

(2)研究協力者
研究協力者氏名：新井　潤
ローマ字氏名：（ARAI, jun）

研究協力者氏名：ベケシュ　アンドレイ
ローマ字氏名：（BEKEŠ, andrej）

研究協力者氏名：大工原　勇人

ローマ字氏名：（DAIKUHARA, hayato）

研究協力者氏名：萩原 順子
ローマ字氏名：（HAGIWARA, junko）

研究協力者氏名：波多野 博顕
ローマ字氏名：（HATANO, hiroaki）

研究協力者氏名：林 良子
ローマ字氏名：（HAYASHI, ryoko）

研究協力者氏名：ヒギンズ アンソニー
ローマ字氏名：（HIGGINS, anthony）

研究協力者氏名：岩本 和子
ローマ字氏名：（IWAMOTO, kazuko）

研究協力者氏名：鎌田 修
ローマ字氏名：（KAMADA, osamu）

研究協力者氏名：金田 順平
ローマ字氏名：（KANEDA, junpei）

研究協力者氏名：国村 千代
ローマ字氏名：（KUNIMURA, chiyo）

研究協力者氏名：羅 米良
ローマ字氏名：（LUO, miliang）

研究協力者氏名：羅 希
ローマ字氏名：（LUO, xi）

研究協力者氏名：孟 蘭
ローマ字氏名：（MENG, lan）

研究協力者氏名：森 庸子
ローマ字氏名：（MORI, yoko）

研究協力者氏名：ムートン ジスラン
ローマ字氏名：（MOUTON, ghislain）

研究協力者氏名：仁科 陽江
ローマ字氏名：（NISHINA, yoko）

研究協力者氏名：奥村 朋恵
ローマ字氏名：（OKUMURA, tomoe）

研究協力者氏名：乙武 香里
ローマ字氏名：（OTOTAKE, kaori）

研究協力者氏名：プーリク イリーナ
ローマ字氏名：（POURIK, irina）

研究協力者氏名：三枝 令子
ローマ字氏名：（SAEGUSA, reiko）

研究協力者氏名：櫻井 直子
ローマ字氏名：（SAKURAI, naoko）

研究協力者氏名：瀬沼 文彰
ローマ字氏名：（SENUMA, fumiaki）

研究協力者氏名：嶋津　百代
ローマ字氏名：（SHIMAZU, momoyo）

研究協力者氏名：昇地 崇明
ローマ字氏名：（SHOCHI, takaaki）

研究協力者氏名：宿利 由希子
ローマ字氏名：（SHUKURI, yukiko）

研究協力者氏名：楯岡 求美
ローマ字氏名：（TATEOKA, kumi）

研究協力者氏名：ヴォーゲ ヨーラン
ローマ字氏名：（VAAGE, gøran）

研究協力者氏名：山口　治彦
ローマ字氏名：（YAMAGUCHI, haruhiko）

研究協力者氏名：山川 礼
ローマ字氏名：（YAMAKAWA, aya）

研究協力者氏名：山元 淑乃
ローマ字氏名：（YAMAMOTO, yoshino）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。